

三条瀬戸物屋町出土の水指・建水・花入

著者	畑中 英二
雑誌名	研究紀要
号	63
ページ	11-22
発行年	2019-03-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1290/00000225/



三条瀬戸物屋町出土の水指・建水・花入

Mizusashi (Fresh-Water Container), *Kensui* (Slop Basin), and *Hanaire* (Flower Vase)
Excavated from Sanjo Setomonoya-cho

Eiji Hatanaka 畑中 英二

はじめに

前稿「考古学からみた和物茶陶の創出とその担い手 ―水指・建水を中心に―」(畑中 2016) および「慶長末年までの水指・建水 ―出土資料を中心に―」(畑中 2018a)において、15 世紀後半から 17 世紀初頭にかけての日本列島産の水指・建水といった喫茶に用いる焼物(広い意味での和物茶陶)の出土資料を検索し、検討を加え、以下に記す幾つかの点を明らかにすることができた。

戦国時代においては、主に信楽・備前・瀬戸美濃窯で水指・建水をつくっていたが、当時の茶会記には天正 15 年以前には信楽焼(水指が多い)と備前焼(建水が多い)しか登場しないことや、それに対応するように信楽窯では水指を、備前窯では建水と水指を専らつくっていたことを明らかにした。これは、それぞれの窯場の意思で棲み分けられたのではなく、茶人や商人が何らかの意図のもとに発注した結果であると考えた。

続く 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけては、水指・建水といった茶陶をつくる窯場が増えていることと 16 世紀後葉までのそれとは様相が一変することが明らかにした。一つは形態。16 世紀後葉までは金属をはじめとする他の素材やすり鉢をはじめとした茶陶に用いられなかった陶磁器を模倣対象としたものであったが、16 世紀末以降に登場するものは、それまで模倣されていなかった形態や祖形が判然としないものが含まれており、新たに「創出」されたものとみてよいと考えた。もう一つは容量。4L を超える大容量の水指が新たに作り出されなくなったことから、茶事の在り方が大きく変容した可能性を想定した。

本稿では、それらに続く 17 世紀前葉(慶長から元和年間)の資料である京都三条瀬戸物屋町から出土した水指・建水に加えて花入の集成と整理を行うことにより具体的様相を明らかにし、検討を加える。16 世紀末～17 世

紀初頭には焼成中に変形してしまったとみられるものや意図的な変形が加えられたものが見られはじめることが知られ、三条瀬戸物屋町出土資料には焼成中に融着してしまったものを多く含む(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編 2016) 点に着目し、当該期の流通構造を明らかにする一助としたい¹⁾。

なお、水指・建水の定義については前稿で示したものと同様である²⁾。

1. 三条瀬戸物屋町の概要

三条瀬戸物屋町出土水指・建水・花入の集成と整理を行う前に、三条瀬戸物屋町とは如何なるものであるのかについて簡単に触れておく。

京都三条通り界隈から 16 世紀末から 17 世紀初頭にかけての陶磁器が大量に出土した(弁慶石町(1987 年度)、中之町(1989 年度)、下白山町(1995 年度))。この界隈は「京都図屏風」(元和 6 年～寛永元年= 1621～24)、「都記」(寛永元年 3 年= 1624～26)に「せと物や町」と記されていることを勘案し、瀬戸物屋に関わる遺物であると考えられた。桃山時代の陶磁器がまとまって出土したことは考古学関係者のみならず陶磁器研究者の耳目を引き、1989 年に根津美術館で「桃山の茶陶」展が開催された(根津美術館 1989)。この時期の陶磁器研究に考古資料をあわせて取り上げる大きな契機になったといえる。

これらの桃山陶器が大量に出土した原因としては、生産地である窯から運んできたものの、傷があるなどの理由から、売り物(商品)にはならないと判断された分を廃棄したとする説(久世 1990、尾野・平尾 2018)と、桃山陶器の流行が過ぎ去ってしまったり、販売することに問題が生じたりしたため、売れなくなった商品をまとめて廃棄したとする説(岡 2001、井上ほか 2005)がある。

後述するように、水指・建水に関しては窯詰状態のまま瀬戸物屋に持ち込まれた可能性が高く、選別され商品にならなかったものが廃棄されたと考えてよいだろう（畑中 2018b）。

廃棄年代については、慶長から元和年間（永田 1994）、慶長年間中期から元和年間初期を中心とする時期（林 2001）、寛永年間初期（岡 2001）、慶長 10 年代から元和年間初期（井上ほか 2005）、1630 年代（永田 2010）など諸説があったが、中之町において共伴する土師器の年代から元和年間を中心とする時期（尾野・平尾 2018）と考えられている。本稿では弁慶石町は慶長年間後半、中之町および下白山町は元和年間を中心とする時期に廃棄されたものと考えておく。

2. 形態と容量からみた三条瀬戸物屋町の水指・建水

（1）水指・建水の形態 一慶長末年までの出土資料との比較を中心に

註 3 に記した形態分類に基づき、水指・建水がどのような形態であるかについて出土地点および産地ごとにまとめる。なお、資料に付された数字は京都市指定・登録文化財「三条せと物や町界隈出土の「桃山茶陶」」の登録番号である。

【弁慶石町】

信楽焼の水指は、Ⅰ－3 類が 2 点（174、175）、Ⅰ－3a 類が 14 点（176～183、185～189、193、200）、Ⅲ－2 類が 1 点（188）、Ⅳ－3a 類が 1 点（184）。建水は、四方が 2 点（219、220）である。

備前焼の水指は、Ⅰ－3 類が 4 点（231、233、234、236）、Ⅳ－4 類が 1 点（235）。建水はⅠ－1 類が 1 点（268）、Ⅱ－1 類が 2 点（266、267）、Ⅱ－2 類が 1 点（239）である。

【中之町】

信楽焼の水指は、Ⅰ－3 類が 2 点（943、945）である。

瀬戸・美濃焼の水指は、Ⅳ－3a 類が 4 点（715～717、719）、Ⅱ－1 類が 1 点（718）である。

高取焼の水指は、Ⅳ－3a 類が 2 点（844、846）、Ⅳ－3 類？（847）が 1 点である。

【下白山町】

信楽焼の水指は、Ⅰ－3 類が 1 点（111）、Ⅲ－2a 類が 1 点（120）、Ⅳ－3a 類が 5 点（103～106、110）、重ね餅が 2 点（107、108）、三段重ね餅が 1 点（109）。建水は、Ⅳ－1 類が 2 点（112、113）である。

備前焼の水指は、Ⅳ－3 類が 1 点（156）、三段重ね餅が 3 点（157、158、164）。建水は、Ⅰ－3 類が 2 点（159、160）、Ⅲ－2 類が 2 点（162、179）、Ⅳ－2 類が 6 点（173～178、161、163）、Ⅳ－3 類が 2 点（161、163）である。

瀬戸・美濃焼の水指は、Ⅳ－3a 類が 1 点（16）、三段重ね餅が 1 点（114）である。

高取焼の水指は、Ⅲ－1 類が 1 点（50）、Ⅳ－3a 類が 2 点（48、49）、袋状が 2 点（51、52）。建水は、Ⅲ－1 類が 2 点（54、56）、Ⅲ－2 類が 1 点（55）である。

【形態の傾向】

全体量の少ない中之町を措き、弁慶石町と下白山町の様相を比較すると、Ⅰ類とⅣ類の比率が対称的である点を指摘することができる。これらは同じく円形基調ではあるものの変形を加えるものであり、後者は形態のバリエーションが豊かであり、かつヘラ目による器表面の加飾も顕著である。前者と形態の傾向やヘラ目による器表面の加飾の程度も似通っている資料群として挙げることができるのが慶長年間末年までの出土資料（畑中 2018）であり、また、後者は先に記したように慶長年間以降に廃棄された可能性が高いことを指摘されている（尾野・平尾 2018）ことを勘案すると、両者の様相差の原因に時間の経過を想定することは不可能ではなく、慶長から元和年間にかけて加飾や変形が進むととらえることが可能である。

【同形態異産地】

下白山町からは、産地を超えて同じ形態のものがみられる。

例えば三段重ね餅については信楽焼（109）、備前焼（157、158、164）、瀬戸・美濃焼（114）、高取焼（49）がみられる。しかし、共有されているのは「三段の重ね餅」という事柄のみで、陶土や釉薬そして製作技法については特段の制約はない。偶然の一致とみるべきであろうか。

さらには、三角花入については備前焼（187）、高取焼（73）に加えて備前焼の伝世品がある（根津 2018）。備前焼のものは焼締、高取焼のものは鉄釉が掛けられている。

これらの共通するのは仕上がりの形態が類似しているという点である。当時流行していた形態であることから偶然一致したのだととらえることもできるが、これらが何れも下白山町から出土していることを勘案すると、下白山町に所在した瀬戸物屋がそれぞれの窯場に「切り型」のようなもので発注をかけた可能性は否定できない。

（2）出土資料の容量

実測図から出土資料の容量の概数を求めた。以下に出土地点および産地ごとにまとめる。

【弁慶石町】

信楽焼水指は、約 3.0L が 4 点（175、180、181、185）、約 3.5L が 10 点（177～179、182、184、186～189、193）、約 4.0L が 4 点（174、176、183、200）。建水は約 2.0L が 2 点（219、220）である。

備前焼水指は、約 3.0L が 1 点（235）、約 3.5L が 3 点

(231、234、236)、約 4.0L が 1 点 (233)。建水は、約 0.5L が 3 点 (266～268)、約 1.5L が 1 点 (239)、約 2.0L が 1 点 (232) である。

【中之町】

信楽焼水指は、約 3.0L が 1 点 (945)、約 3.5L が 1 点 (943) である。

瀬戸・美濃焼水指は、約 2.5L が 1 点 (718)、約 3.5L が 1 点 (716)、約 4.0L が 1 点 (717)、約 5.5L が 2 点 (715、719) である。

高取焼水指は、約 5.0L が 2 点 (844、846) である。

【下白山町】

信楽焼水指は、約 3.5L が 1 点 (111)、約 4.0L が 1 点 (108)、約 4.5L が 1 点 (109)、約 5.0L が 3 点 (103、107、110)、約 6.0L が 1 点 (106)、約 7.0L が 1 点 (105)、約 7.5L が 1 点 (104)。建水は、約 1.0L が 2 点 (112、113) である。

備前焼水指は、約 3.5L が 1 点 (158)、約 4.0L が 1 点 (157)、約 4.5L が 1 点 (164)、約 6.0L が 1 点 (156)。建水は、約 1.5L が 1 点 (178)、約 2.0L が 11 点 (159、160～163、173～177、179) である。

瀬戸・美濃焼水指は、約 3.5L が 1 点 (114) である。

高取焼水指は、約 3.5L が 2 点 (49、51)、約 4.0L が 3 点 (48、50、52)。建水は、約 1.5L が 1 点 (56)、約 2.0L が 1 点 (54)、約 2.5L が 1 点 (55) である。

【容量の傾向】

前段階と同様に、水指・建水の中心的位置を占める信楽焼と備前焼は、前者は水指で後者は建水が目立つ傾向は依然として続いているとみてよいだろう。

天正年間までの水指の容量は約 4.0L を超える大容量のものが一定を占めていたが、慶長年間までのものは約 4.0L を超えるものがみられない(畑中 2016,2018a)。それと年代的に近しい三条瀬戸物屋町の弁慶石町においても、大容量の水指はみられない。しかし、元和年間を中心とする時期に廃棄されたと考えられる中之町や下白山町においては再び大容量の水指が一定数みられるようになり、確実に容量のバリエーションがある。

大容量の水指が顕在化するのは一時期だけのものなのか、三条瀬戸物屋の特性であるのかについては、資料の増加を待ってあらためて検討することとしたい。

3. 焼成中の変形・融着とその要因

(1) 重ね焼きの痕跡を持つ資料

天正年間までの茶陶は、基本的には最上段に窯詰されている。しかし、三条瀬戸物屋から出土する資料には上方に重ね焼きの痕跡を持つものがみられる。ここではどのような重ね焼きの痕跡が見られるか状況の整理をす

る。

【弁慶石町】

信楽焼水指は 18 点のうち上下直接重ね 8 点 (174、177、181、182、185、186、189、200)、上に直接重ね 4 点 (180、182、188、193)、下に直接重ね 2 点 (178、187)、最上段(下に重ね) 3 点 (175、176、184)。建水は 2 点のうち上下に直接重ね 1 点 (219)、下に直接重ね 1 点 (220) である。花入は 3 点のうち上に直接重ね 1 点 (209)、下に直接重ね 1 点 (211)。上に重ね率は水指 66%、建水 50%。

備前焼水指は 5 点のうち下に重ね 4 点。建水は 4 点のうち上下に直接重ね 2 点、下に直接重ね 2 点である。上に重ね率は水指 0%、建水 50%。

【中之町】

信楽焼水指は 2 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。

瀬戸・美濃焼水指は 5 点のうち上下に直接重ね 1 点 (718)、上に重ね 3 点 (715、717、719)。花入は 2 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。上に重ね率は、水指 80%。

高取焼水指は 3 点のうち下の重ね 1 点 (844)。花入は 2 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。上に重ね率、0%。

【下白山町】

信楽焼水指は 10 点のうち上下重ね 2 点 (103、110)、下に直接重ね 6 点 (104～107、109、110)、最下部に窯詰め 1 点 (108)。建水は 2 点のうち上下重ね 1 点 (112)。花入は 7 点のうち上下重ね 1 点 (145)、下に直接重ね 1 点 (144) である。上に重ね率は、水指 30%、建水 50%、花入 14%。

備前焼水指は 4 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。建水は 12 点のうち上下に直接重ねが 3 点 (173、174、176)、上に直接重ねが 1 点 (161)、下に直接重ねが 3 点 (178、179、160)。花入は 5 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。上に重ね率は、建水 33%。

瀬戸・美濃焼は水指 2 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。花入は 1 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。

高取焼水指は 5 点のうち上に重ねが 1 点 (52)。建水は 3 点のうち上に重ね 1 点 (55)。花入は 2 点のうち重ね焼きの方法がわかるものはない。上に重ね率は、水指 20%、建水 33%。

【重ね焼きの傾向】

以上の数字をどのようにとらえるべきであろうか。痕跡が明らかではないことからカウントされないものも含み込んでの数値であることと、天正年間までの資料には基本的に上方に重ね焼きの痕跡がみられないことを勘案すると、非常に大きな数字であるととらえることができ

よう。天正年間までのものとは異なり茶陶の上に他の製品を窯詰めしていることが明らかとなったと言える。

この時期に変形・破損している資料が散見される理由の一つは、上方から荷重がかかることによると言えるだろう。

(2) 「窯買い」を想定させる出土資料

これらの資料には非常に興味深いものが含まれていることが指摘できる。

まずもって完形品が存在しないこと。完形品に見えるものも僅かながらあるものの、弁慶石町（信楽水指 176・177・180・200、信楽花入 209、備前水指 234）中之町（信楽水指 943）下白山町（信楽水指 111、信楽花入 143、備前花入 185）のように「底切れ」しているものもあり、どこかしら破損していたり、亀裂が入っていたりと実用に供するには問題があるものばかりが出土している。1点1点を吟味して窯場から持ち込まれたとは言いがたい状況がある。

小物に関しては窯道具が融着したままのものや窯道具そのものも出土し、袋物に関しては信楽焼水指に顕著に見られるように複数個体を重ねて焼成したことによる融着が確認できるものが多い⁴。

つまり、窯場で1個体ずつ品質を見極めたものではなく、窯出しの状況のまま（融着したものもそのまま）瀬戸物屋に持ち込まれたことを示唆しており、「窯買い」若しくは「袋買い」等と呼ばれる状況であると解釈でき⁵、一般的には商人側が主導権を握った生産・流通構造であるとみなされる。発注通りの形態であるかどうかや歩留まりについては商人側が判断するものであり、手間や輸送費は通常の生産流通のあり方と比較すると大きくなるが、商人側が品質の管理を主眼に置いたものと言えるだろう。仮に焼成不良の製品であっても、商人側に“見出される”ことにより後述するように新たな価値観をもった商品となることにも大いに留意しておきたい。

(3) 加飾の進行と割れ歪みへの評価

加飾の進行

かつて取り上げた天正年間までの資料群、慶長年間までの資料群、そして本稿で取り上げた三条瀬戸物屋町出土資料のうち慶長年間を中心とする弁慶石町、同じく元和年間を中心とする中之町および下白山町をあわせみると、16世紀から17世紀前葉にかけての流れとしてとらえることが可能である。これによると、天正年間までの資料群は素直な円形基調のもので占められるが、慶長年間を中心とする時期の資料群には円形基調でありながら変形が加えられて割れや歪みをもつものがみられ始める。元和年間を中心とする時期の資料群には素直な円形基調

のものを見出すことは難しく、歪み（意図的な変形）は多く採り入れられ、ヘラメなどによる器表面の加飾も多くみられる。

割れと歪みへの評価

消費地から出土する水指・建水といった焼締袋物の茶陶は、天正年間前半までは最上段に窯詰されることが一般的であった（畑中 2018）が、遅くとも16世紀末、つまり慶長年間には上方にも製品を重ねて窯詰したとみられるものが確実にみられる。融着や荷重がかかることによる亀裂や破損のリスクが生じているのだが、この時期にはそれを物ともせず量産していることが伝世品や消費地出土資料からうかがうことができる。これらには割れや歪みがあるものも含まれており、天正年間前半までには見られなかったものである。この時期の焼締袋物にみられる特徴の一つであると言えよう。敢えて自然な歪みや割れを生じさせる為に（故意に）無理な窯詰をしたのではないかとすら思わせるものである。

こういったものは伝世品においても生爪（個人蔵）や破袋（五島美術館）、柴庵（東京国立博物館）には三条瀬戸物屋町から出土するものと同様の重ね焼きの痕跡あるいは割れや歪みを伴うものである。かつては窯場で廃棄され流通することすらなかったものが流通するようになり、加えて一定の価値を与えられて伝世するようになっていくについては、審美観の変化があったからとみてよいだろう。

この審美観の変化を支えたものが、先に触れた窯買いであると考えられる。一定の単位で窯場から焼物を買上げることにより、かつては失敗品として窯場で廃棄されたものが三条瀬戸物屋の店裏に持ち込まれ、見出されることによって世に出回ることになったのだろう。

おわりに

先に述べたように天正年間前半以前に、備前窯は建水、信楽窯は水指を専らつくっており、当時の茶会記にも記されている。この棲み分けと見られる現象は、2つの窯場が示し合わせたのではなく、茶人と窯場の仲立ちをする者が差配したと考えた（畑中 2016）。ただし、天正年間で挟んだ前後で形態を始め窯詰めの方法や割れと歪みといった要素が加わることによって製品の雰囲気は大きく変わることは広く知られている。この間に、生産・流通・消費の流れの中に何らかの変化があったとみるべきだろう。そこに生じた変化を三条瀬戸物屋町から出土した陶片から見出していこうというのがここでの主眼の一つでもあった。

慶長から元和年間にかけての三条瀬戸物屋町の水指・建水・花入を観察した結果、その多くが窯場からはぼ窯

詰状態のまま瀬戸物屋町に持ち込まれたのちに選別されたと推測することができた。また、そこには焼成および重ね焼きなどの失敗による融着・破損した製品が含まれていたはずであるが、そこに価値が見出されて流通することになったことが伝世品から知られている。このように窯場から離れた場で見出されることによって新たな美の世界を提示されることになった。また、本稿では触れていないが切り型のようなものを用いて複数の窯場に同一形態の製品を発注したとみられる事例もある(畑中 2018b)。このことから、瀬戸物屋が製品を作り出し価値づけすることを担っていた側面を見出すことができる。

三条瀬戸物屋関係資料は膨大で、発掘調査から四半世紀以上経過した現在においても未だ多くの明らかにすべき課題が残されている。日暮れてなお道遠しの感はあるが、資料化を進めるとともに検討を加えていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたっては多くの方々からのご助力やご指導を賜った。とりわけ資料の実見や図化にあたっては京都市文化財保護課、京都市埋蔵文化財研究所、京都市考古資料館の御厚意を得た。以下にご芳名を記し謝意を表します。【順不同】

岡佳子(大手前大学)、吉川義彦・平尾政幸(関西文化財調査会)、前田義明・高橋潔(京都市考古資料館)、馬瀬智光・西森正晃(京都市文化財保護課)、大立目一(京都市埋蔵文化財研究所)、倉澤佑佳(東京藝術大学大学院生)、桜井英治(東京大学)、尾野善裕(奈良文化財研究所)、西田宏子・下村葉穂子(根津美術館)

註

1 2018年度に根津美術館にて開催された『新・桃山の茶陶』(根津美術館 2018)の展示に関わって開催されたシンポジウム「桃山の茶陶 ～どのようにつくられ、どのように売られたか～」において筆者が発表した「京都三条瀬戸物屋町出土陶片―その問題の所在―」の内容のうち、論旨に関わる事実関係、とりわけ17世紀前葉に陶器を大量廃棄した三条瀬戸物屋出土資料のうち水指・建水・花入の具体的様相を明らかにし、検討を加えることとする(畑中 2018b)。

2 喫茶そのものが指す内容は広く、茶会記が記す茶湯はその中に含まれる。出土資料が茶湯に用いられたものかどうかを明らかにし得ないこともあり、広く喫茶に用いられた伝世する焼物に類するものを「茶陶」とみなし、論を進めることにしたい。また、産地を示す際には「～窯」、その産地で生産されたものは「～焼」と呼称する。

本稿で取り扱う水指と建水について簡単にみておこう。水指は釜の湯を補うほか茶碗や茶筌を漱ぐ水を入れておく器で、建水は茶碗を清めた湯や水を捨てる器である。つまり、茶会においては最初から水が入っているのが水指で、最終的に水で満たされるのが建水であり、両者ともに水を貯めおく容

器である。それ故に機能上の差異はなく、特定の使用痕がみられる訳ではないことから出土資料の場合は両者を区別する術を持たない。また、出土状況等の考古学的知見から用途の検証を試みようとしても、それを明快にすることは極めて困難である。

故にここでは伝世品の形態・法量を参照しつつ、それに類するものを水指・建水と想定し、出土資料の集成を試みることにしたい。伝世品を参照すると、法量の大小で分けることはできそうであるが、ひとまず、水指と建水を分けることなく、資料の分析を経て機能を想定することにしたい。

ここでの集成は、伝世品の水指・建水の形態・法量に類似するものを対象としたものである。それ以外のものが用いられていた可能性は否めない。また、伝世品のそれに類似するといえども、それらが水指・建水として用いられていたかどうかは厳密には明らかにし得ない。それ故、当時の全体像を復元することは不可能であることを先に断わっておく。

3 水指・建水の形態分類

I-1 類 筒状をなし、口径に対する器高の比率が5割を切る平らなもの。

I-2 類 筒状をなし、口径に対する器高の比率が5～7割の浅いもの。

I-3 類 筒状をなし、口径に対する器高の比率が7割以上の深いもの。

II-1 類 鉢形をなし、体部最大径に対する器高の比率が5割を切る浅いもの。

II-2 類 鉢形をなし、体部最大径に対する器高の比率が5割以上の深いもの。

III-1 類 壺形をなすもの。頸部がつくもの。茶陶であるかどうか判断に迷うものが多く含まれる。

III-2 類 壺形をなすもの。頸部がつかないもの。器高の高いものと低いものがある。

III-3 類 壺形をなすもの。肩が張り、算盤珠状をなすもの。

IV-1 類 播鉢と同様の形態をとるもの。

IV-2 類 播鉢形とは異なる器の内面に播鉢様の播目を入れるもの。

V類 鼓形(或いは芋頭形)のもの。

VI-1 類 筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が5割を切る平らなもの。

VI-2 類 筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が5～7割の浅いもの。

VI-3 類 筒状を基調としつつ変形させているもので、口径に対する器高の比率が7割以上の深いもの。

※なお口縁部の形態については、矢筈口にしているものは「a」とする。

4 先に述べたように、上方にも重ねて窯詰されるようになるのは、融着や荷重がかかることによる亀裂や破損のリスクが高まることをものともせず、“数”を求めたことによると言える。

なお、亀裂や破損といった「自然」な変形を意図していたかもしれないと考えられる事例もある。現在の窯詰では特に大物に関しては歪みを防ぐために口縁などを水平にすることに腐心しているし、民俗調査でもそれを確認することができる(木立 2018)。つまり、窯詰の際には水平を出すことが当然の知識として備わっていたとみてよい。しかし、敢えてその定石を外しているとみられるものがある。五島美術館蔵の「破袋」である。関口敦仁氏はCT画像から再現造形を想定しており、それは下白山町出土高取水指(050)と同様のものとなっており、それを物質構造計算のシミュレーションを行うことにより人為的に変形を加えていないが窯詰の位置をずれたこ

とにより歪みと割れが生じたと結論づけている(関口 2014、同 2015)。窯詰の際には水平を出すことを知っていたにも関わらず焼き台の中心から大きく外れたところに製品を置いているのは、「失敗」ではなく「未必の故意」、いや「認識ある過失」であったのではないかと思わせるのである。

- 5 これに類するものとして、上野城出土資料を挙げることができる。窯が存在しないはずの上野城内から“ほぼ”完形に復元できる伊賀焼陶片や窯道具が一定量出土しており、窯から城内に持ち込まれ、選別された後、不要なものが廃棄されたと考えられるのである(畑中 2007)。

【参考文献】

- ・井上喜久男ほか 2005「座談会 洛中出土の桃山陶器」『陶説』第 625・626 号、日本陶磁協会
- ・岡佳子 2001「洛中三条界限と桃山茶陶－唐物屋から瀬戸物屋へ－」『三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館
- ・尾野善裕・平尾政幸 2018「『桃山陶器』流行年代考」『中近世陶磁器の考古学』第八巻、雄山閣
- ・木立雅朗 2018「瓦窯の構造と技術－天井・床面角度と窯焚き技術－」『窯跡研究会第 17 回研究会 瓦窯の構造研究 8 発表要旨集』窯跡研究会
- ・京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編 2016『京都市文化財ブックス第 30 集 三条せと物や町：桃山茶陶』
- ・久世康博 1990「平安京左京四条四坊(HL104)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』京都市市民文化局
- ・関口敦仁 2014「古伊賀水指 銘「破袋」の変形プロセスについて－CT 画像からの仮説－」『愛知県立芸術大学 紀要』No.43、愛知県立芸術大学、
- ・関口敦仁 2015「古伊賀水指 銘「破袋」の変形プロセスについて その 2 －変形シミュレーションからの考察－」『愛知県立芸術大学 紀要』No.43、愛知県立芸術大学、
- ・永田信一 1994「桃山の茶陶を掘る 自由闊達な時代を映す地下の遺産」『京の歴史と文化 4 戦国・安土桃山時代 絢 天下人の登場』講談社
- ・永田信一 2010「京都三条出土の茶陶」『季刊 考古学』第 110 号、雄山閣
- ・根津美術館 1989『桃山の茶陶』
- ・根津美術館 2018『新・桃山の茶陶』
- ・畑中英二 2007『続・信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版。(P.1 ～ 365)
- ・畑中英二 2016「考古学からみた和物茶陶の創出とその担い手」『中近世陶磁器の考古学』第四巻、雄山閣、103-124 頁。
- ・畑中英二 2018a「慶長末年の水指・建水－出土資料を中心に－」『研究紀要』62 号、京都市立芸術大学美術学部、43-52 頁。
- ・畑中英二 2018b「京都三条瀬戸物屋町出土陶片－その問題の所在－」『シンポジウム 桃山の茶陶 ～どのようにつくられ、どのように売られたか～』根津美術館にて開催(2018 年 11 月 17 日)
- ・林 順一 2001「中之町出土資料にみる桃山陶」『三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館

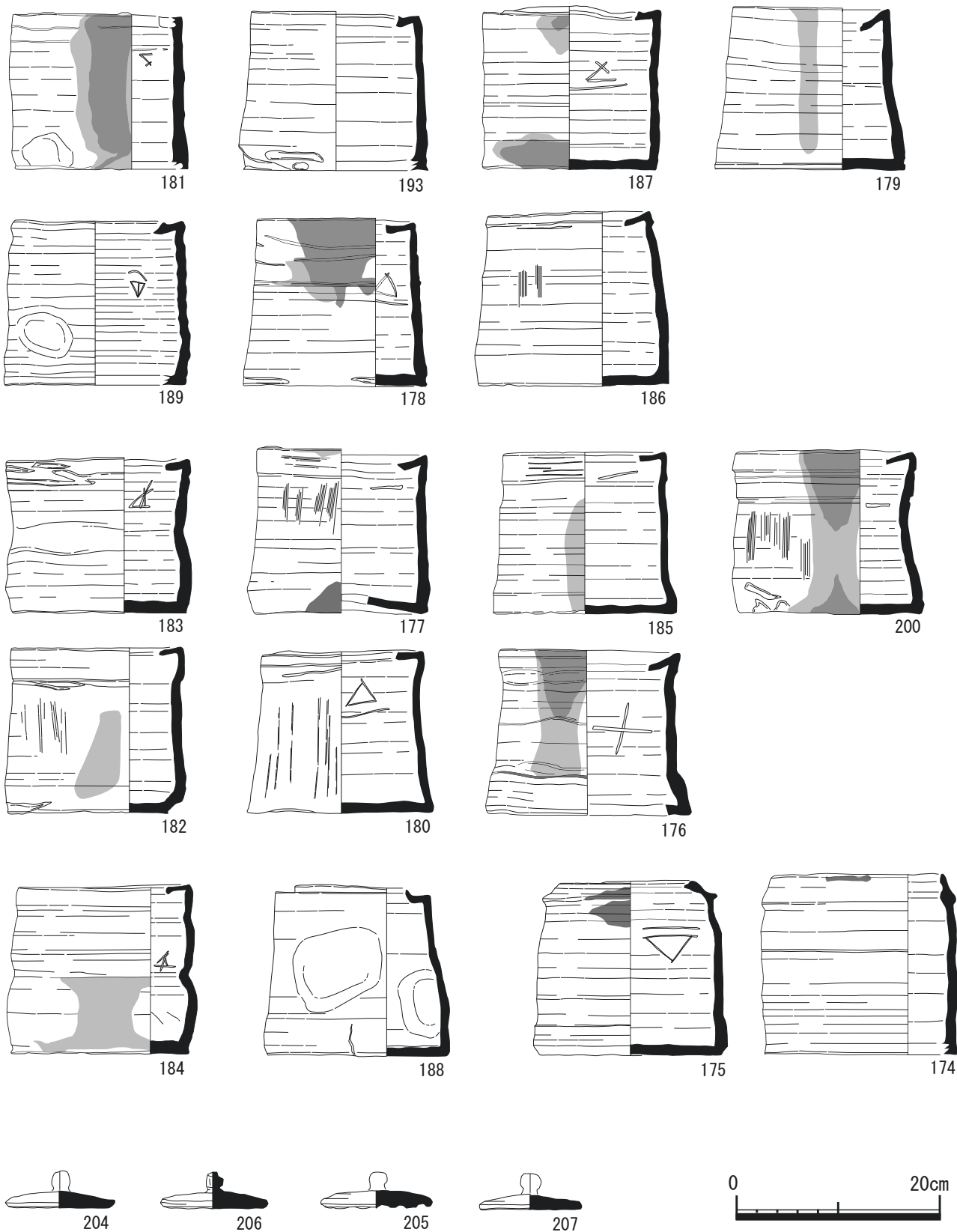


図1 弁慶石町出土水指・建水・花入（1）

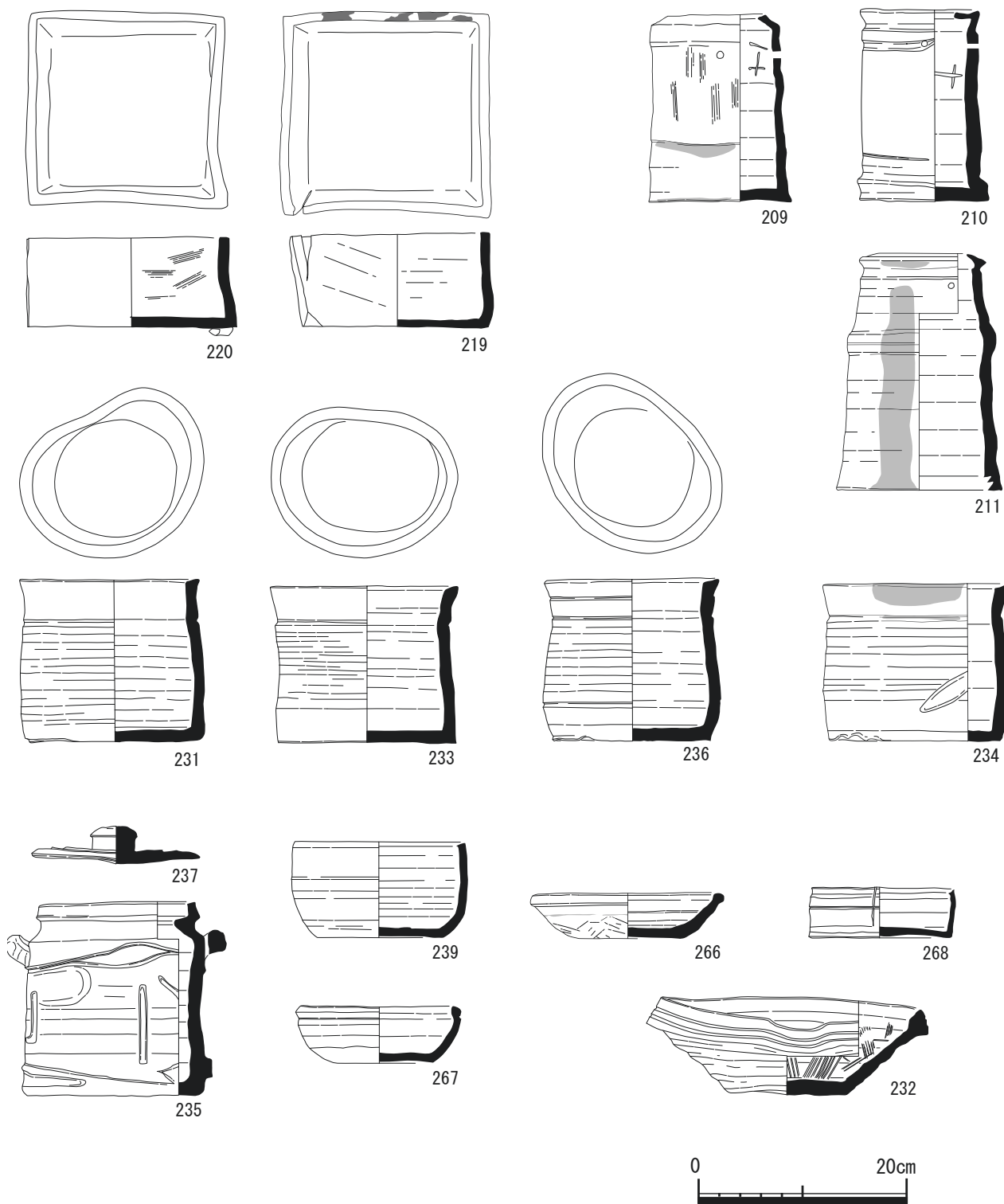


図2 弁慶石町出土水指・建水・花入（2）

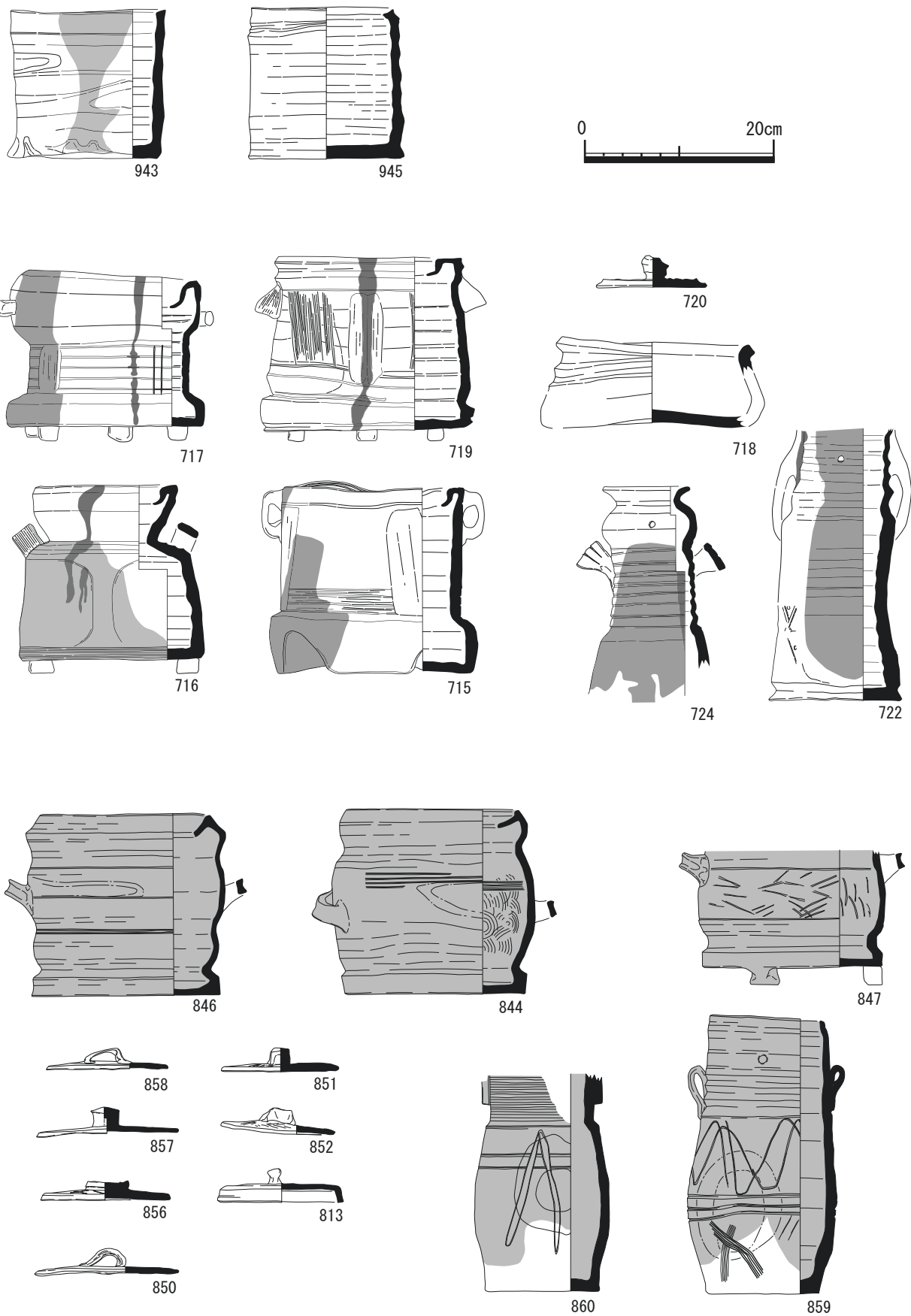


図3 中之町出土水指・建水・花入

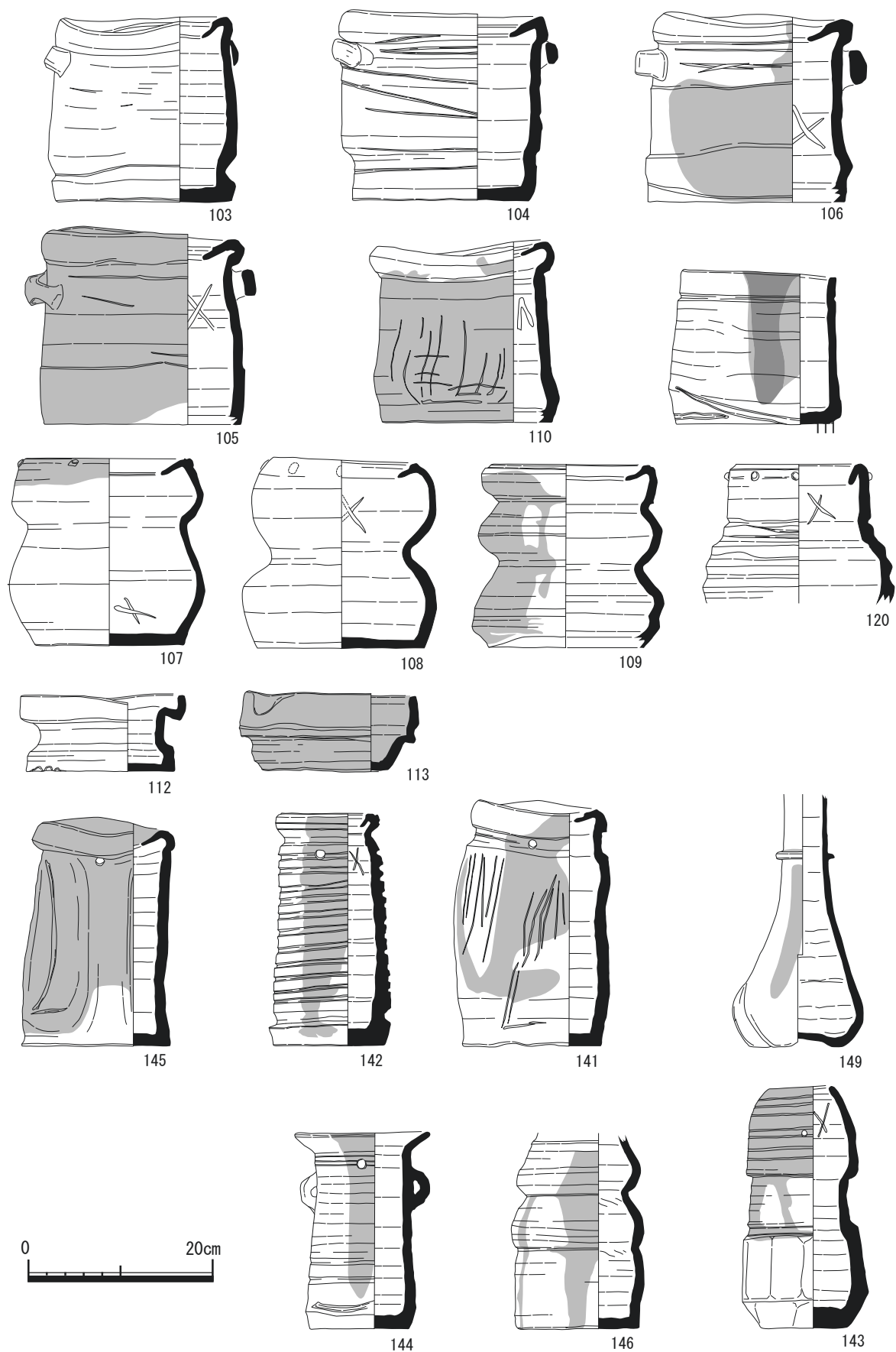


図4 下白山町出土水指・建水・花入（1）

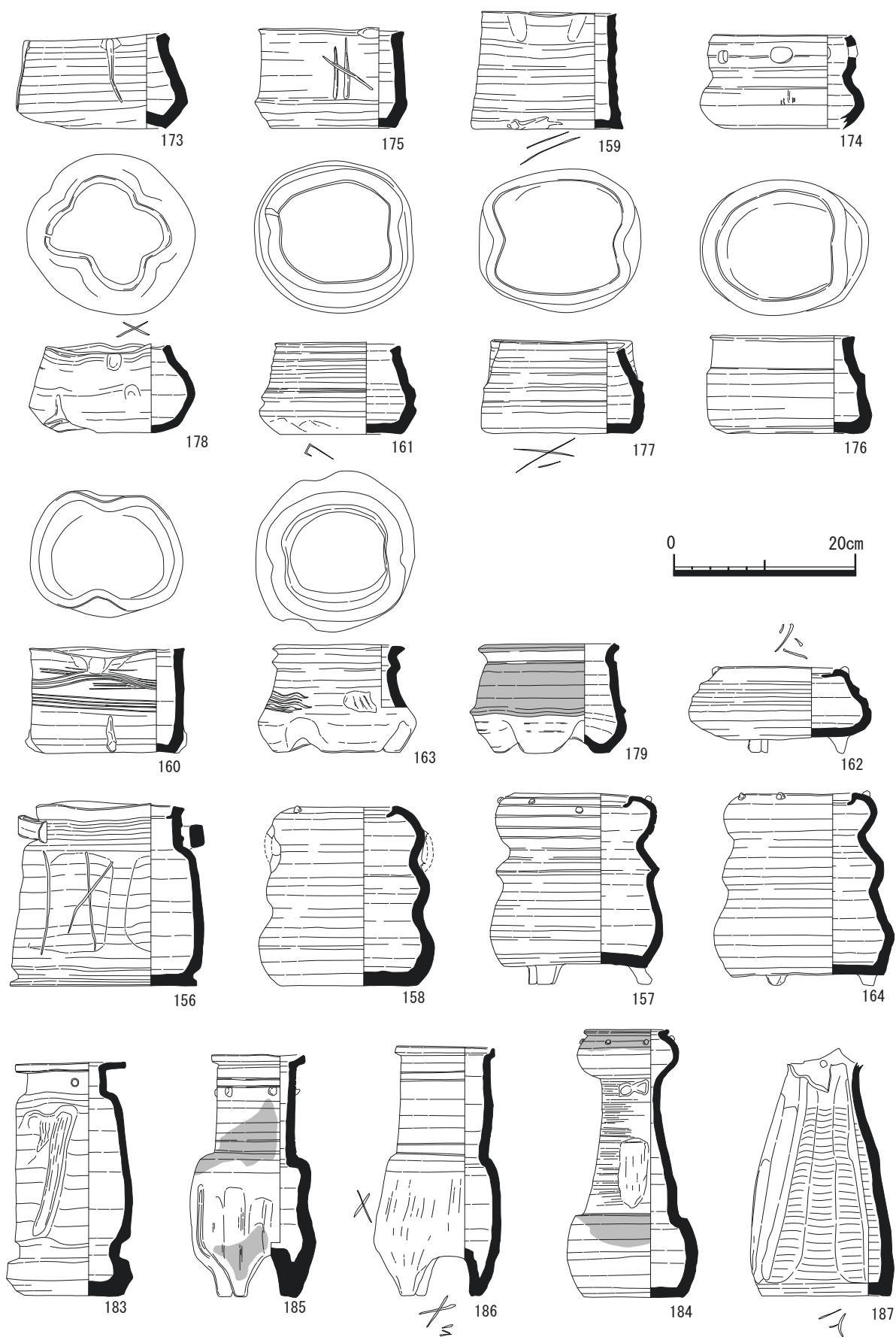


图5 下白山町出土水指・建水・花入（2）

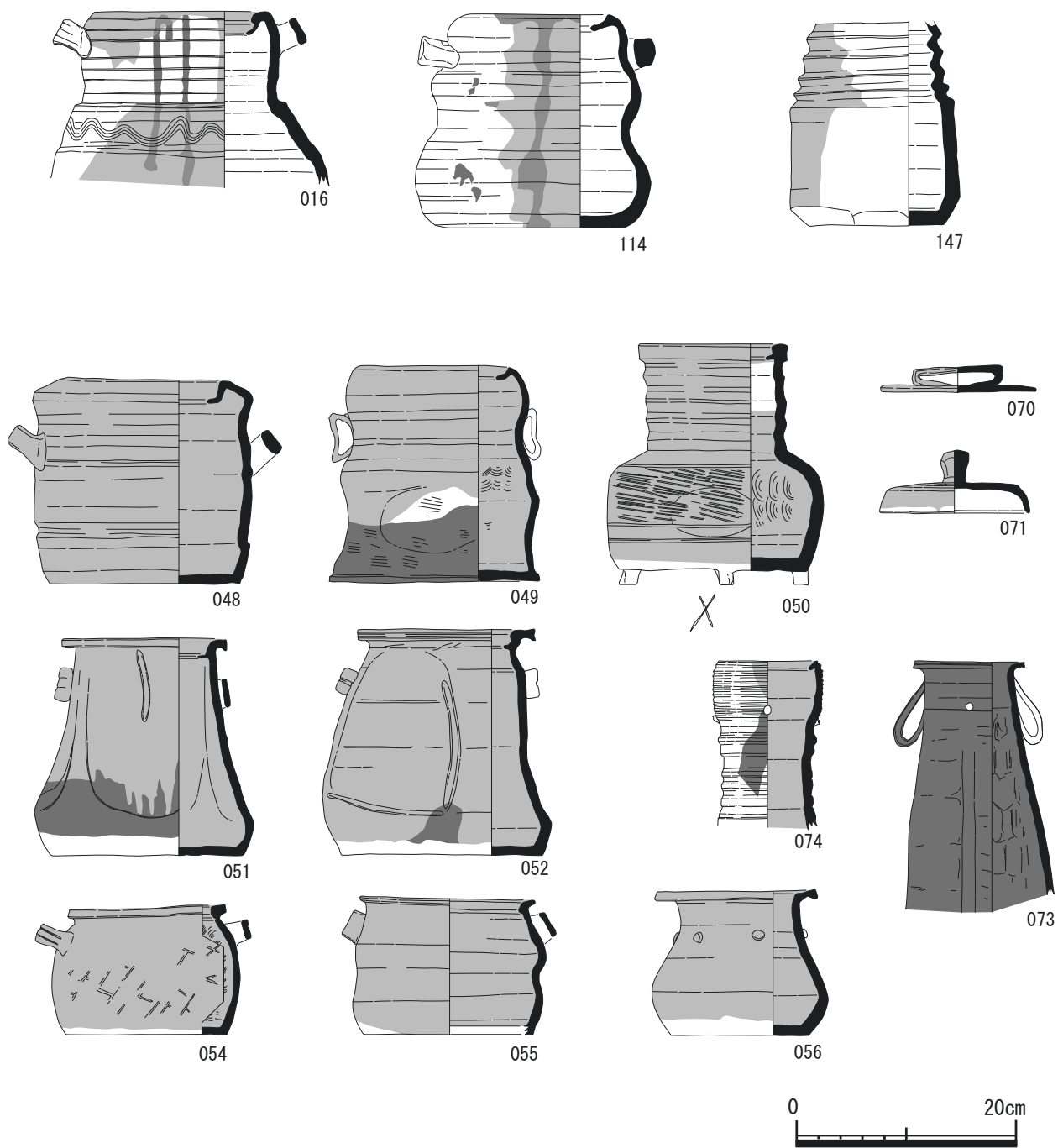


図6 下白山町出土水指・建水・花入（3）